

冬のカミキリムシ探し？

兵庫県生物学会東播支部

日 時：2017年(平成29年)3月20日(月) 10:00～12:00
場 所：やしろの森公園 加東市下久米108-1-3
講 師：小倉 滋先生
参加者：会員8人(北村 健, 稲葉 浩介, 植田 吉則, 上根 大輔, 梶原 洋一, 西口 龍平, 真野 育三, 横山 法次)
中高生12人 加古川西高(3人), 滝川中・高(3人), 白陵中・高(6人)

今回の研修テーマは「冬のカミキリムシ探し?」。講師の小倉先生が準備された標本や枯れ木を母屋前の広場のテーブルに並べ、さっそく講義と実習がスタート。実に話題が豊富で興味深く、あっという間の2時間だった。では、その内容のいくつかを紹介する(写真1,2)。

オサムシとゴミムシの姿は実によく似ているが、そこには決定的な違いがあった。この2種類の混ざった標本をじっくり観察してその違いを見つけるよう指示されたが、誰も気づくことはできなかった。実はオサムシの上翅には条溝と点刻列があるが、ゴミムシには条溝はあるが点刻列がない。「おさ」とは織機の部品で長方形の枠に鋼の薄い板が密に櫛のように取り付けられた箎(おさ)のことで、この隙間を経糸が通る。つまりオサムシの上翅の条溝を箎に、点刻列をその隙間を通る経糸に見立てたのだということを箎の実物を示して説明された(写真3)。

枯れた竹からどんな虫が見つかるか。用意された竹をのこぎりで切ると竹の粉のような物がどっさり出てきた。ナタを使ってさらに細かく割っていくと、竹の材の中からきれいな赤色のカミキリムシが出てきた。ベニカミキリである。赤く色づいた成虫から、成虫になったばかりでまだ灰色のもの、さなぎ、そして幼虫まで様々な段階の虫が出てきた。ところで、黄色っぽくなった幼虫はさなぎの前段階で、もう餌を食べないそうである。そしてこの幼虫の変化が簡単に観察できる方法を教わった。鉛筆に葉包紙を巻きつけて筒状にし、一方の端をひねって閉じ、その中に幼虫を入れて反対側も閉じる。これを鉛筆立てにでも立てておけば中の様子が透けて見えるというものである(写真4,5)。

枯れたエノキの短い丸太。切断面の中心付近には大きな食痕がある。さて何が出てくるか。巻いてあったテープを剥がして開いてみると、孔の中に幼虫の一部が見えている。木を逆さにしてたたいたり。潰さないように注意深く取り出そうとしていると、白くて長く大きな幼虫がズルッと出てきた。初めて見るタマムシの幼虫である。これには全員びっくり(写真6)。

他にもいろいろ教えていただいた。もっともっと話を聞きたいところだったが、予定時間も過ぎており、残念ながらこの日の研修を終了した。

(文責 北村 健)



写真1 小倉滋講師



写真2 講義の様子



写真3 (奥) 箴 (手前) こま



写真4 ベニカミキリ採集



写真5 ベニカミキリのさなぎ



写真6 タマムシの幼虫